



五洲新報第十七號

第七百一號
明治八年九月廿日

3497



414
A. 705



新報第十七号「珠

總論

電報三項

英吉利

三 緬甸トノ交際紛紜ヲ生セシ事

三 議院ニ於テ魯西亞ノ蕞々印度領ニ近

ツクニ付テノ論議

三 西班牙人英ノ郵船ヨリ捕ヘラレシニ

付テ交際ノ紛紜

大正十一年
候爵邸
贈

以太利

三澳斯太利ト貿易ヲ廢スルノ條約

魯西亞

三英ト盟約ヲ結ビシ論

奧地利

三先帝遺訓ノ事

埃及

三控訴院開業式

英王ノ告諭

希臘

三王ノ位ヲ辭スルト否サルトノ説

三公使ハラヲリチ氏本國ヨリ呼還サル

事

支那

三水軍ノ秘奥ヲ窺フ為メ有司ヲ歐洲ニ
派ス

五洲新報第十七號

總論

方今歐洲ニ於テ西國ヲ除クノ外ハ各國人民
兵革ノ災ニ罹ル者漸ク無キニ至レリ然ルニ
奧帝歸國アリテダルマニヤニ入ルヤ霎時ニシ
テ土耳其領タルヘルゾゴイナニ一揆起リ其勢ヒ
甚々熾ニナリ之ヲ鎮靜セン為メニ此地ノ鎮臺
ヨリ派出セシ官吏電線ニテ報告シテ云ク我輩
勉勵シテ説諭ムルト虽其旨ニ服セス終ニモス
タルト奥領ノ間ノ地方ニ一揆ヲ起シ若シ一揆

ニ党與セザレハ死ヲ以テ脅迫スト而メ七月二十
十六日土耳其ヨリ兵ヲ出シテ之ト激戦シ互ニ
死傷多カリシト虽モ未タ勝敗ヲ分カタス八月
一日ノ電信ニ拠レハセルビア公ミルラン此一
揆ニ就キ澳ノ外務省ト商議セン為メニ維也納
ニ赴キタリ元來セルビアハ第一番ニ一揆ニ連
合シ之レカ為メニ諸公國一揆ヲ助援セリ諸公
多クハ土耳其ノ半屬國タルヲ以テ一揆起ルヲ
幸ニシ此機ニ乘シテ土耳其ノ勢ヲ殺キ獨立タ
レシナリ謀而シテ若シ一揆永ク鎮靜セヌハ
澳魯ノ兩國中立スルヤ否未タ判然タラス且ツ

セルビア公ノ維也納ニ行ケルハ己ノ一揆ヲ助
ケンヲ請ハンガ為メナル可シ而シテ若シ澳國
此請ニ應シテ之ヲ援クルニ至ラハ歐洲土耳其
ノ全地ニ大關係ヲ生シ且ツ歐洲ノ業寧ヲ妨害
スルニ至ルベシ
八月十三日ノ電信ニ拠レハ巴力門閉院ノ片英
皇帝雲南ニ於テマルガリー氏ノ兇殺ニ遭ヘル
事ニ付キテ隱語ヲ以テ左ノ宣告アリ曰ク雲南
ニ於テ兇殺事件ハ朕ノ深ク悲哀スル所ニシテ
其事情ヲハ密ニ穿鑿セズンハアル可ラス宜シ

ク尽カシテ兇殺ヲ行ヘル本入并ニ其煽動者
ヲ罪ス可シト蓋レ此宣旨ニ煽動者ト云フ辞ハ
或ハ緬甸或ハ支那或ハ又緬甸ト支那ノ西
國ヲ合セ指スヤ未タ判然タラス宜シク詭味シ
テ本意ノアル所ヲ察知ス可シ

壹丁堡公即テ近頃魯帝ノ皇女ト婚姻セ
ル英帝ノ第二皇子ハサクツセコビユルグカダ
ク公位ヲ副ク可キ權利アリ而シテ當サクツセ
ビユルグ公ハ英皇帝ト婚セルアルベルトノ兄
ナリ且ツ當公副子ナキヲ以テ其位ヲ次ク可キ

人ハ壹丁堡公ナリ然ルニ英皇子ト日國
政府ハ約ヲナシテ其權利ヲ讓リ渡セリ其約定
ハ壹丁堡公ニ年々八万磅ヲ給スルヲ以テ
日國政府サクツセビユルグ公ノ位ヲ嗣ク
可キ英皇子ノ權利ヲ讓リ受ケタリ之レニ因テ
大難事起ラザリシ其故ハ以前日國ニテ英皇子
ノ日耳曼聯邦中ノ一邦ノ位ニ即クラ惡ミテ明
ラカニ之ヲ妨礙セリ故ニ英ノ皇子必スシモ此
權利ヲ得ントレハ極メテ日國ニテ之ヲ拒
ム可シ果シテ此拒ヲ得ル所ハ英人心ニ快ラス

之レヨリ紆擾生ス可シ然ラハ即チ英皇子ノ此
約定ヲナセルハ英人ノ禍ヲ救ヒシト云フ可
シ

愛爾蘭事件未タ全ク穩ナラス已ニ八月
一日來テ倫敦府ニ會スルモノ八萬人共
ニ及逆ヲ謀ルト云フヲ以テ捕縛セラレテ獄
ニ繫カルヘニアン^ト罪人ト称スル者ヲ赦免セシ
トテ政府ニ願ヒ出セリ

近頃英國巴力門ノ議官某離宮ヲ愛爾蘭ニ
設ケテ皇帝陛下時々之ニ臨幸シ給フ可シ

ト建言ニ及ヘル所之ヲ非トスル者多キヲ以テ
此說終ニ行ハレズ

魯國ヨリ日澳兩國ニ兵士ノ數ヲ減少センコトヲ
打合ニ及ヒケルニ應シテ日國ハ明年兵數ヲ
減セントス然ルニ佛國ハ益々兵數ヲ増加シ國
會ニ於テ軍費ニ一千八百万フランクヲ備ヘン
トノ投票アリ

ガゼット新聞抄譯 九月十三日

電報 倫敦八月二十六日 ウェード氏北京ニ於

テ輕侮サレタリトノ風説英國ニ行ハレリ

ウェード氏英政府ニ報告シテ云ク支那政府ノ所
為ヲ見ルニ甚タ心ニ快カラス就テハ切要ノ時
ニハ急速出兵相成候様預メ御準備之レアリ候
ハ、御都合宜シキト存候也

土耳其ノエサット氏首相ノ職ヲ退タリ

倫敦八月二十九日

カルホルニヤノヘルキユ

銀行及ニ国立「ゴールド」銀行共ニ閉店セリ是
レニ由リサン、フニンシスコハ大ニ動揺セリ

倫敦八月三十日 新聞紙上ニ英支ノ交際ヲ論

シ云ク支那ハ敵意アルヲ以テマルガリー氏克

殺ニ就キテハ手強ク談判ニ及ヒテ償補ヲ取ル

可シト諸説同論殆ト一意ニ出ルカ如シ

同地 同月同日 セルビア人土耳其ノ南境ニ

侵入セリ

セルビア人ハビユルガリヤ人ヲ已レニ党典セ

シメント勉勵ス

此電報ニ據テ見レハセルビア人ヘルジゴビ

ニヤ人ニ党典シ土耳其領ニ侵入セルハ之レ

ヘルジゴビニヤ兵ト合セントスルノ明ラカ

ナリ此一揆瓊々タルノ如シト虽モ恰モ癸

燭ヲ火藥庫ニ投入シ一度火ヲ癸スルニ至リ

テハ其勢復々撲滅ス可アラサルカ如ク苟ク

モ此一揆一タヒカラ得ルハ昔年ノ普佛ノ

戦争モ企テ及フ可ラサルノ一大変事ヲ生ス

可

エゴーシユシヤボシ新聞 九月九日

土耳其

八月六日維也納ヨリノ電報ニヘルゾエイサノ
叛黨人ハ土國人ト數回戦争ヲ為シ終ニトレ
ク^レ田^ニ其郭外ノ一部ヲ燒キタリ但シ此ト
レ^レビクハ堅固ニ築城ヲ為サバル場所ナリ

「エコー」ニ「エジマホン」新聞 九月九日

印度

八月八日倫敦ヨリノ電報ニ中央亞西亞ノ昏翰
ニ曰クコカシニ於テ叛党アリ大ニ擾乱ス而シ
テ其汗ハ逃奔シ其汗ノ卒ニ兵隊ハ此叛党
人ト合併レタリ

アムステルダム新聞 七月八日

英国

(二)「タイムズ」新聞ニ曰ク英国ノドー格拉斯ホルシー
ド氏マンダリイ緬甸國ノ首府ニ使シ其要領ヲ得スレテ
歸リレヨリ以來緬甸ト英国ノ交際甚ク睦マシ
カラス其景況恰モ千八百五十九年ノ戦争前ノ
如シト緬甸國王ハ頗ル慇懃ニ英国ノ使節ヲ待
遇シタレ氏其要求ノ諸件ニ至テハ一モ之レヲ
許容セス就中英国ノ兵隊緬甸國ノ領分ヲ通過
スルノ權ヲ有セントノ一天至重ノ件ハ断然之

レヲ拒ミタリ故ニドローグラス、ホルシード氏ハ廓
尔喀多ノ英領印度ニ歸リ事ノ成リ難キ趣ヲ復
命セリ尔後印度ノ奉行ノルトブロツク氏ハサ
リユスブリ藩属事氏ト数々文書ヲ往復レテ將
未施々可キ處置ヲ合議セリ而シテ和親全ク破
レタリト云フニアラサレ氏「タイムス」新聞ノ説
ニ從ヘハ英国ニ於テハ既ニ戦備ニ取掛ルトノ
田ナリ

抑、英国ノ要求スル所緬甸ニ於テ大關係アリト
スル所以ヲ了知セト欲セハ先ツ清国ニテ最

モ富饒ノ地ト称ス可キ雲南ハ緬甸國ノ北東ニ
位シ其間僅カニ半独立ノ一蕃族地ヲ隔ルノ
トノヲ知ルヲ要ス

緬甸王ハ独リ專握スル雲南ト貿易ノ大利ハ殆
ント歳入ノ根基トモ謂ツ可シ故ニ今英人ノ進
入シテ王ト利ヲ競ハンノヲ厭ヒ務メテ之レヲ
拒絶セントスルナリ蓋シ其意我國ト雲南トノ
通商貿易ニ就テノ大關係ハ英人ノ其地ニ入ル
ノ自由ヲ得ルノ日ニ至テ絶ユ可シト又「タイム
ス」新聞ニハ英国ノ雲南ト通商スルマ蕃族ノ襲

撃ヲ支フ可キノ虞無キ能ハサレハ固ヨリ危難
ナキヲ保チ難シトノ旨ヲ載セタリ然ルニ又同
新聞ノ説ニ英國ハ緬甸若シクハ支那ノ官吏ト
談判ヲ始ムル以上ハ決シテ敗ヲ取テ一步モ退
ク可キ卑怯ノ意アラズト

故ニ「タイムズ」新聞ノ説ニ拠レバ蓋シ印度政府
ハ自國ノ貿易保護ノ為ニ兵隊ヲ緬甸境内ニ
旅行セシムルノ權ヲ回ク求ム可シ若シ緬甸王
之ヲ拒ム時ハノルトブロッツク氏ハ先ツ海陸ノ
兵ヲ即昆^{緬甸ノ英}屬ノ首府ニ派遣シ執威ヲ示サン此ノ

如クシテ尚其事成就セサレハマンダレー征伐
ノ師ヲ起スニ至ル可シ

又「タイムズ」新聞ニ云ヘルニハ英國ハ緬甸ノ地
ヲ得ント欲スルノ意固ヨリナシ然ルニ却テ之
レヲ攻取セサルヲ得サル場合ニ至ルヲ以テ
已レノ危急トス何ントナレハ英國ニ於テ緬甸
國ヲ奪フハ支那ハ境ヲ接近スレハ到底支那
ト戦争ヲ醸ス可キノ恐レヲ免カレサレハナリ
ト此説實ニ肯綮ヲ得タリ而シテ之レニ由テ之
ヲ觀ルニノルトブロッツク氏ハ緬甸ト未タ戦端

ヲ開カサルニ方リ談判上ニ於テ寂モカヲ竭ス
トナル可シ

英華新聞 七月九日

英國

(三)

ヘーリット、エチラン氏キバ領ヲ魯国ニテ奪領
セルニ就キテノ議案ニ動議ヲ起シテ云ク中亚
細亞ニ魯国ノ手ヲ延シ東方ニ領地ヲ廣ルヲ
勤ムルハ憂慮ス可キトニテ其勢ヲ巧ニ避ク
ルヲ以テ上策トスルハ誤マレリ其故ハキリシ
了戦争以來魯国領地ヲ廣ケテ其境高加索山
黒海裏海ニ至リ且近頃キバ及ヒオツクス其有
トナレリ斯ク領地ヲ開廓ニスルヲ以テ自ラ道

路ヲ通シ我印度領ノ近傍ニ大軍ヲ集ル一甚ク
容易ナノ故ニ魯國ト言語ヲ以テ争フハ無益ノ
一ニテ他ニ其勢力ヲ制スルノ策ヲ建テスンハ
アル可ラス曰テ思フニアフガニスタンハ我印
度領ノ鎖鑰タレハ宜シク深慮ノ賢士ヲ撰テ其
地ノ公使トシ且ツユーハラテス谷ニ沿テ錢
道ヲ築キ魯ノ動静ヲ伺ハシム可シト

ハンコユリー氏前ノ動議ヲ次イテ云ク我國史
ヲ見ルニ近頃魯國ノ為メニ我策ヲ看破セラレ
レガ如キハ古今未ダ有ラサル所ナリ是レ他ナ

八十

レ我近時ノ宰相ハ輕シク事ヲ信スルヲ以テナ
リト

又カンパベル氏ハ前説ニ反シテ云ク我國ニテ
ハ巧ニニ避クルヲ上策トス其故ハ我國魯國ヲ
歴スルノ勢カナク若レ魯國ノ攻撃ヲ受クルハ
ハ我防ヲ固スルノニ斯ク我國勢カナキヲ以テ
中亞細亞ノ事ニ就キ之ヲ論議スルハ膏ニ益ナ
キノニナラス反テ我失策ヲ示スナリ其害知ル
可シト

ボールク氏(外務大輔)議院ニ出セル書類ノ外我

政府ト魯国政府ノ往復唇類ハ猶ホ公布シ難シ
之ヲ公布ス可キ時至レハ公布ス可シ兵時之ヲ
見ハ兩政府ノ交誼厚キヲ知ル可シ而シテ先
キニ魯ノ兵ヲ舉ケシハ其意キバヲ奪掠センガ
為メニアラザルヲ保証ス可シ何トナレハ魯国
ニテ之ヲ為スト虽モ己レニ益ナキヲ明ラカナ
レハナリ而シテ政府ハ巧シニ避クルヲ上策ト
スト難セラレト虽モ避クルト避ケサルトハ
時勢ニ関係ス又為ス可キヲアルヲ捨テ徒ラニ
無益ノ事ヲ為ルト難セラレトモ是レ亦彼レ何

事ヲス可キヤ未タ形ハレサルヲ以テ我ヨリ先
ンシテ事ヲ求ムルハ我英國ノ上策ト曰ヒ難キ
一万余ナリ我政府ハ中亞細亞ニ領地ヲ廣ムル
ヲ欲セス而シテ政府ノ欲スル所ハ英魯ノ地境
ヲ遠隔セシムルヲ事トス然レハ其境間ノ地ヲ
シテ中立セシムルハ甚難事ニシテ動スレハ誤
ヲ生シ易シ故ニ其事行ヒ難シ且ツ先タテテ莫
ク起スハ我政府ノ欲セサル所ナルヲ以テ我印
度領ノ近国ヲレテ獨立セシメ我ヨリ之ヲ奪
掠スルノ憂ナカラント信セシメンテ欲スルノ

然レ氏斯クナシテ後來我國ノ益ヲ計ルニア
ラス而シテ我印度政府ノ外国トノ交際ノ一ニ
於テ論スルハ我職外ノ事ナレ氏アフガニスタ
ント交誼ヲ厚ウスルノ策ハ今ニ始マルニア
ナルハ宜ク議院ニ於テモ察ス可キ事ナリト
ボトレルジョーンストーレン氏云ク我ノ印度ニ於
ケルカ如ク他日魯國ハ必ス支那ヲ併吞セン是
レ魯ニテホカラシテ得シト大ニ心ヲ費スヲ以
テ徵ス可シ其故ハ此地ハ結隊旅客ノ支那ニ至
ルノ要路タレハナリ若シ魯ニテ支那トノ貿易ノ目

由ヲ得ルキハ之レカ為メニ費セシヨリ其益大
ニシテ亞細亞貿易ヲ專ハラニスルニ至ラン
明カナリ又今迄歐洲貿易ヨリ得タルノ利ニ比
スレハ甚タ大ナル可シ而シテ魯ハ力ヲ尽シテ
支那ノ心ヲ得ン
一ヲ務ム可シ其故ハ我ハ阿片
貿易ヨリ戦ヲ起シテ圓明園ヲ燒ク等ノ暴ヲ行
フニ彼レハ静カニ支那ト貿易條約ヲ結ラ利ヲ
獲ル
一ヲ計レリ且ツ魯人タレハ其領地廣カリ
貿易盛ナルヲ喜ハサル者アランマ而レテ斯ク
ナスヲ得ケルハ英國アルヲ以テナリ故ニ魯人

ノ独リ患フル所ハ英国ノニ而シテ若シ魯ニテ
英ノ貿易品ヲ自由ニ賣買ヲ許シナハ魯國ノ版
圖益大ナル氏我ニ於テ亦利アリ然レハ魯ハ己
ノ威權ノ行ハル、國ニ我貿易品ヲ送ルヲ禁ム
其一例ハ其國ニテハ我貿易品ニ税ヲ課スル
百ニ付キ四十ナルニ魯ノ貿易品ニハ只ニ二半
ナリ又我印度ニ茶ヲ培養セシニ幸ニシテ繁茂
セリト虽モ之ヲ魯ノ市場ニ輸入セントスルニ
魯國ハ之ヲ嚴禁セリ是レ魯國ハ我英国ノ北京
ニ於テ大ニ威權ヲ張ルヲ以テ名トシ遂ニ斯ク

スルモノナリ故ニ我巧ニニ避クルノ策ヲ支那
ニ施シナハ魯ノ憂フル所トナル可シ且ツ魯ハ
常ニ日本支那ニ對シテ云ク我國ノ信友國ト云
フ可キモノハ唯貴國アルノニ英佛ハ我敵國ナ
リト且ツ魯人ノ説ヲ聞クニ日本魯ト約ヲ結ビ
若シ魯他國ト戦争起ルキハ日本魯ノ為メニ其
敵國ノ船舶ヲ港内ニ入ルヲ禁ス可シト故ニ予
ハ叢紫ニ從フト云ヘリ

「ガゼット」新聞 九月九日

同國

〔三〕西班牙ノコロ子ル官某ハ近日ホルトリコニ於テ
英國蒸氣船「エデン」号ニテ捕ヘラレ終ニ砲殺セ
ラレタリ右ニ付キ各國領事等大ニ此事ヲ非ト
シ反論スルモノ頗ル多シ蓋シ此事甚タ交際上
ノ處置ニ叶ハサルヲ以テ恐ラクハ一時ノ紛紜
ヲ生ス可シ

「メモリアルジグロマチック」新聞抄訳 七月十七日

以太利

〔一〕六月二十二日維也納駐劄ノ以太利公使伯爵

ロビヤン氏ハ千八百六十七年四月二十三日該

國ト~~奧都利~~斯ノ間ニ決定シタル貿易條約ノ更

改ノ本國政府ヨリ公告セル公書ヲ伯爵アルド

ラシニ渡セリ

其節ロビヤン又氏ハ本國政府ニ於テ新條約ノ

決定ニ関スル談判ヲ近日開クヲヲ希望スルト

ノ旨ヲ述ヘタリ

「モニツールユニベルセル新聞 六月十五日

魯西亞

〔三〕予輩嚮キニ數回東洋ノ事件ニ付キ魯英兩國ノ
間ニ盟約了リシトノ一ヲ挙ケテ看官ニ示セ
カ最モ其事情ヲ詳カニスル維也納刊行新聞
ノ説ニ拠レハ此盟約ノ起リシハ此頃亞細亞ニ
於テ回々教徒再々勢ヲ興起セシニ原由スルモ
ノナラン是ヨリ先キメツカ^カ回々^カ教^カノ^カ宗^カ司^カ回々^カ
教徒ノ信仰ノ熱心ヲ再發セシメン為メ連リニ
教ヲ四方ニ傳播セントセシカ今日ニ至テ此舉

全ク成ラントスルノ勢ナリ又同新聞ノ説ニ從
ヘハ土耳其帝ハ此挙ヲ袖手傍觀シテ止ムモノ
ニアラス必ス其率先ヲ為スコシト又エミルハ
子孫ノ稱メツトイワクローベールノ土耳其帝ニ噶什喀尔
國ノ君權ヲ興ヘントセシニ土耳其帝ハ回徂日
ヲ移シテ決セサリシカ遂ニ之レヲ受クルトニ
決セリト又曰ク欧羅巴人ハ現今亞細亞ニ於テ
回々教徒ノ為メニ脅カサルニ曰テ相共ニ力
ヲ合セ之レヲ防カサルヲ得サルノ勢ニ至レリ
故ニ亞細亞ノ事件ニ付キ此回魯英ノ兩國盟約

ヲ結ビレハ實地止ニ於テ勢止ムヲ得サルニ由
ルモノナラン然リト虽モ予輩ヲ以テ之レヲ觀
レハ此挙亦歐洲一般ノ為メニ治平ヲ維持スル
ノ具トナル可シ

「メモリアルジプロマチツク」新聞抄訳 七月十七日

ハニキル

奧地利

(三) 奧地利ノ先帝ヘルジナンドハ其総遺物相統人

フランツァ・ジョセフニ已レノ位ヲ継カシメタ

リヘルジナンド帝ノ資産ハ不動産ヲ算入シ其総

額凡ント一億五千万フランクニ及ヘリ該帝

財産ヲ理メシヤ其家ヲ理メシ如ク節儉規矩ヲ

旨トセリ而シテ其遺物中ノ一部分ヲ以テハッ

ヤンヌノ典舖館ニアル典物ヲ悉ク償還シテ之

レヲ各其所有者ニ還典セシメタリ

「モリアルジプロマチック」新聞抄訳 七月三日

埃及

〔三〕六月二十八日埃及王ハ「ケセルテン」ノ宮殿ニ於

テ此回該國ニテ創立シタル「亞勒散」

控訴院ノ開業式ヲ厳格ニ執行シタリ

当日其式ヲ觀ントテ來レル衆人ノ中ニ「モリヨ

ン」都府ノ銀行主管ヲ始メ佛國ノ豪商數多來

レリ

埃及王アル「アツスル」ハ該國ノ宰相職及

諸貴官ヲ率ヒテ其中央ニ坐シ裁判官ニ左ノ辭

令ヲ達ヘラレタリ

予土耳其皇帝陛下ノ扶助ト各國ノ好情トニ因
テ司法ノ改革ヲ成就シ新規ノ裁判所ヲ設立ス
ルヲ得タリ而シテ今卓爾タル汝等有司予側
ニ會同スルヲ見ル何ノ幸福カレニ如カン予今
ヨリ汝有司ニ裁判ノ事務ヲ委任シテ少シモ疑
フ所ナシ雖レ汝等有司ノ賢明ナルニ頼リ衆庶
各其処ヲ得ルニ至ル可シ又其裁判ハ衆皆之レ
ニ敬服ス可シ汝等有司今日ヲ以テ我國ノ青史
ニ於テ開明新紀元ノ元日トナス可シ而シテ予

上帝ノ助ケニ因リ此大業ヲ保チ後世ニ至ル迄
不変ナルヲ信シ得タリ

右辭令畢リテ各國公使モ王ニ祝詞ヲ献シ次テ
宮中ニ於テ大宴會ヲ設ケラレタリ

「モニツトルユニベルゼル」新聞 六月十五日

希臘

〔三〕先頃ヨリ英國ノ諸新聞紙上ニ希臘國ノ事ニ就
キ甚タ安穩ナラサル電報書ノ文ヲ出セリ然ル
ニ其文面ノ趣ハ事實齟齬スルモノト思想セラ
ル即希臘王ジヲルジ今其國ニ殆ント堪
可テサルノ難事アルニ當テ辭職セントノ言ヲ
出セシトナキヲ保証シ難シト虽モ現今ノ景況
ヲ察スルニ王辭職ス可キノ理ナシ故ニ予輩ハ
却テ此重大事ノ果シテ虚ナルヲ信ス思フニ

ケルジ^キ王^キ辭職スルモ更ニ國事ヲシテ易カラ
シムルノ理ナク却テ之レヲ重大ニシテ遂ニ恢復
ス可ラサルニ至ラシメン而シテ今時ノ希臘國
ハ巴カ門政事ノ弊害ヲ受ケ政事黨數派ニ分レ
相一致セス是ヲ以テ該國ノ主トシテ事ヲ執ル
者ハ恰モ小説ニ云ヘル脚下ノ汚潦ヲ察セス仰
テ天文ヲ觀ルニ彷彿タリ亦危カラスヤレヲ要
スルニ一國ノ難病ニシテ大變革ヲ施スト虽モ
復タ治シ難キモノナリ
故ニ予輩案スルニ希臘國ノ局外中立ヲ保証ス

ル各國ニ於テハ該國ノ事ニ就キ勉テ穩當ノ處
置ヲ施ス可シ而シテジ^キケルジ^キ王辭職ノ事
果シテ實ナルニ至テハ各國此處置ニ心ヲ留メ
サル可カラス而シテ王辭職ノ一事ハ魯英仏ノ
三國ニ於テ人々皆欲セサル所ナリ

「メモリアルジプロマチック」新聞抄訳 七月十七日

希臘

〔三〕英國駐劄ノ希臘公使バラヲリチ氏ハ本國ヨリ

呼ヒ還サレシカ其レニ付キ交際上ノ一音談

マリ茲氏呼還シノ命令并ニ其一等書記官ジ

ナジウ氏ニ其代理ヲ任スルノ命令ハ各直ニ其

当人ニ通達マリタリ而シテジアナジウ氏ハ別

ニバラヲリチ氏ヲ呼還ス旨ヲ英國政府ニ報告

ス可キ命ヲ受ケタリ然ルニバラヲリチ氏ハ嘗

テ英國皇帝ニ進シタル委任状アルヲ以テ該國

政府ニ猶^{*}公使ト認許セラレシトテ思ヒ自ラ
其呼還状ヲ英國皇帝陛下ニ達セサル内ハ希臘
公使ノ名目ヲ失ハザルトテ主張ス
故ニバラヲリチ氏ハ本國ノ外務省ノ命令ニ從
フトテ肯シセス

希臘國ノ外務卿ハ再度迄バラヲリチ氏ニ命令
書ヲ送レ氏該氏敢テ其命ニ從ハス之レニ因テ
止ムトテ得ス外務卿ハアチ^テ駐劄ノ英國公
使ニ頼リ直チニバラヲリチ呼還ノ旨ヲ英國外
府ニ公告スルトテ請ハントス

「ラルト」新聞抄訳 九月九日

支那

〔二〕嚮キニ支那政府ニテ有司二名ヲ派シテ歐洲各
國有名ノ港口ニ遊歴シ以テ泰西水軍ノ妙奧ヲ
窺ハシメタリシカ今回此二人ノモノ英國ホル
ツモリスニ到リ砲船「エキセル」ト号ニ乘シ
テ水軍ノ術ヲ操セントテ請フ因テ海軍事務官
等其意ヲ賞シテ乃チ之ヲ許スト云フ

八三十一
カ

